火災予防のため
個人の住居も 届け出義務が

火災予防条例の改正によって、従来は届け出義務のなかった個人の住居で貯蔵し、取り扱ってきた危険物も、一定量以上の貯蔵、取り扱いについては届け出が必要となります。

例えば、個人の住居で灯油五〇〇㍑以上一、〇〇〇㍑未満を貯蔵し、取り扱う場合、消防署への届け出が必要です。

詳しいことは、南国市消防本部予防係（☎(63)3511）までお問い合わせください。

【南国市消防本部】

住まいの
高齢者対策を 考えてみませんか

日本人の平均寿命は年々伸びており、急速に高齢化社会に突入しつつあります。

この高齢化社会に対応するために、福祉や医療を充実することはもちろんですが、生活の基盤は何と言っても「住まい」。そこで、住宅金融公庫四国支店では、学識経験者の皆さんの協力で、高齢者向け住宅の自己診断システムを作り、安心して暮らせる家、便利で居住性の高い家となるような新築、リフォームをお勧めしています。

人生八十年時代――住宅の新築やリフォームを考えている皆さん、住宅をチェックして快適ライフを。

※詳しいことは、住宅金融公庫四国支社建設サービス課（☎0878(25)0515）またはサービス相談課（☎0878(25)0516）までお問い合わせください。

なんごく土曜市
お花と食品まつり

◪日時　五月二十六日(土)　午前九時から
◪場所　土曜市会場
◪内容
○お花、さつき、えびね苗無料進呈（先着五百名）
○もち投げ
○福引き
○友好姉妹市（愛媛県広見町の近永日曜市）友情出店
○アトラクション

――同和教育シリーズ――
部落はいつ、だれが、何のために つくったのでしょうか⑤

山内一豊が、土佐の藩主に任ぜられたのは、一六〇〇（慶長五）年でした。一豊が入国後、各地方役人に命じて、土佐一国の米の生産高を正確に調査させたところ、表高（おもて）の二十四万石より少ない二十万三千石しかありませんでした。この窮乏の藩財政を立て直すため、新田開発その他の開発事業を推進し、幕末ごろには土佐五十万石とも言われた生産の基盤作りをしたのが、二代藩主山内忠義に仕えて、土佐藩を切り回した野中兼山でした。

兼山は今日、兼山神社に神として祭られ、土佐開拓の大恩人として後世の人々から尊敬されており、南国市とも深い関わりのある人物です。南国市の中心の後免町の町名も兼山に由来します。兼山の香長平野開拓の動脈として開削された舟入川の中流に、稲吉新町をつくり、ここへ移住した人たちには、あらゆる課役、課税を免除して町の発展を図ったので「諸税諸役御免の地」として御免町ができ、後に後免町と改名して今日に至っています。

兼山は号で、本名は伝右衛門と言い、土佐藩主の傍系（祖母が一豊の妹）の出で、生まれは播州（兵庫県）です。少年時代から神童と呼ばれ、実母の教育方針も優れ、素晴らしい人物に成長しました。十四歳で親類筋の本山城主野中氏の養子となり、十七歳で執政（しせい）の一人に加えられ、十九歳で仕置（しおき）家老の重責につき、後世の人々から「兼山の前に兼山なく、兼山の後に兼山なし」とたたえられた偉大な人物でした。

彼の三十年余りの治世の間に紙、鰹節その他各種の専売制による藩財政の確立、新田開発、物部川の山田堰、仁淀川の八田堰や運河の開削をはじめ、手結や津呂の港の建設など、今日の農漁業で兼山の偉業の恩恵を被っているものは数え切れないほどあります。

しかし、これだけの業績を上げた人物の最期は、誠に惨めなものでした。

一六六三（寛文三）年、反対派の讒言（ざんげん）で失脚し、自分が指揮して堀り上げた舟入川の近くの土佐山田町中野に〝押しこめ隠居〟にされ、間もなく急死し、その翌年には兼山の遺族すべて、宿毛の安東（一説には山内）家に預けられ、以後五十年近くこの地に幽閉され、最後の男系の子が死に絶えると、やっと老齢の三人の女子が許されるという悲惨な運命をたどっているのです。兼山やその遺子がなぜこれほどの悲しい運命を歩まされたのか、その理由を明らかにする必要があります。

それは、兼山治世の三十年間、あまりにも厳しい事業の強行と税の取り立てのすさまじさや、言語に絶する過酷な強制労働のため領民が疲弊し、特に農民の恨みの声が山野に満ちあふれ、藩庁でもこれを無視できなくなったため、反対派の意見を入れて、その責任をすべて兼山一人に押し付け、本人はもとよりその遺族すべてが厳しい処分を受けたのです。

（つづく）